

蘇芳集

秋 燕 峰岸よし子

パンを焼く

青山

丈

通る日と通らない日と白木槿
仏壇に置かれて裂ける柘榴かな
家に居ただけでの釣瓶落しかな
川風に吹かれて行くとの酉
寂聴瀬戸内寂聴逝11/9が逝く梟を見に行く日
一枚の十一月のパンを焼く
日の落ちてゆく枯蓮とアパホテル

秋の蝶翔つも消ゆるも草の丈
なかぞらに風吹き変はる一位の実
白鷺の点となるまで刈田晴
日を溜めてゆがみ自在にくわりんの実
刈り伏せし草に月夜の匂ひかな
音信の絶えし人恋ふ雁のころ
秋燕や疎開せしこと茫茫と

耳二つ

宮尾直美

わが胸の高さ秋蝶舞ふ高さ
少年の帽子の中のつくつくし
どんぐりの机上にころげ山の音
秋風や遍路の杖に鈴二つ
菊膾父に余生のなかりけり
あをあをと揺らぐわが影十三夜
虫の夜の冷えてしまひし耳二つ

茨の実

八木下 末黒

傘巻いて

小川 美知子

眸忌やラ・クンパルシートかけて聴く
秋晴や送電塔を塗り変ふる
罌雲送電塔の人小さく
送電塔ネットに包む秋の風
烏瓜日ごとに夜が深くなる
自転車を押して坂ゆく茨の実
鶉の声物の高みに目を遣りぬ

自分史

吉田 幸敏

急ぎの用

木内 憲子

秋霖の明けたる畝を立て直す
地下足袋でまだ畦にゐる山廬の忌
ピンホールカメラに小鳥来てをりぬ
ままごとのよそゆき言葉赤のまま
ふつと木犀踏切はまだ開かぬ
書くべくもあらぬ自分史のこづち
そちらから風見えますかすすき穂に

がらがらの駐輪場や木の実降る
寂しさも映つてしまふ秋の水
行変へて本心を書く蓼の花
晩秋の棒となるまで傘巻いて
月末の予定込合ふ櫛紅葉
パソコンをスリープにして冬が来る
見てゐないとき冬雲は奔りけり

露の世を生きて急ぎの用ばかり
草むらに水鳴る後の更衣
人を映して秋水のたたずまひ
椿実到老い先といふ言葉など
水の辺に秋思の顔を改める
車窓より街を低きに見て暮秋
雨の歩をのばす山頭火の忌なり

月見だんご

小島 みつ如

朝 寒

下平直子

月見だんご美事彼の手造りとふ
満月にかかると薄雲羽衣よ
空澄めば海も又すむ漁舟
はるか大島に白船秋の鳶
秋の雲ちぎれてみんな空色に
介護所の昼餉きらきら新米らし
潮騒の音波居間まで小六月

夜 霧

清水裕子

木の花の紙のごとくに散つて秋
灯りて家並はなやぐ暮の秋
たまさかの外出夜霧に髪濡れて
落葉積もる思ひ通りにならぬ日よ
椅子一脚置いて良夜の窓辺かな
雨音に目覚めこれより夜の長き
森に冬朝の木洩れ日鳥翔たす

朝寒を言ひ筑波嶺の青さいふ
水底の白砂に秋の光あり
衣被母を偲べば父をなほ
秋薔薇の白の眩しく父の忌来
一盞の酔に歌うて夜の長き
わが町の湖畔の秋を惜しみけり
ゆく秋の一山揺する風の音

曼珠沙華

富田正吉

それぞれがそれぞれを見る曼珠沙華
曼珠沙華ふれあふ揺れのありにけり
曼珠沙華祈りの数と思ふかな
曼珠沙華照り翳りする父母の墓
曼珠沙華日暮が疾うに来てゐたり
曼珠沙華どんどん森へ入るなり
まだ川の向かうに見える曼珠沙華